

やまがたじょうさんのまるあと
山形城三の丸跡 (第 19 次)

遺跡番号 201-003
調査回数 第 19 次
所在地 山形県山形市旅籠町他
北緯・東経 38 度 42 分 02 秒・140 度 56 分 02 秒
調査委託者 山形県村山総合支庁建設部都市計画課
調査原因 山形広域都市計画道路事業 3・2・5 号旅籠町八日町線 (山形市七日町地内)
調査面積 311 m²
受託期間 平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
現地調査 平成 28 年 6 月 13 日～9 月 1 日
調査担当者 齋藤健 (調査主任)・色摩優吾
調査協力 山形市教育委員会、山形県教育長村山教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 中世・近世
遺構 土坑・ピット・溝跡・石組
遺物 土師器・陶磁器・金属製品 (文化財認定箱数: 21 箱)



遺跡位置図 (1 : 50,000)

調査の概要

山形城は、馬見ヶ崎川扇状地に 14 世紀後半に最上氏^{もがみ}の始祖斯波兼頼^{しばかねより}により築かれたとされ、代々最上氏が居城としてきた。17 世紀初頭には、最上義光^{よしあき}により 57 万石の大名の居城として相応しい規模の近世城郭として三の丸が拡張され、現在の山形市街地の原型となった。

しかし、義光の死後に発生した御家騒動により最上氏は改易される。その後入封した鳥居氏は馬見ヶ崎川の流路変更工事や山形五堰^{ごせき}の整備、二ノ丸の大規模な改修を

行い、現在の姿が完成された。

17 世紀末以降山形藩は藩主が短期間のうちに度々変わり石高も徐々に減る。このことから、広大な城の維持は困難となり荒廃する。18 世紀後半の秋元氏入封時には、本丸は更地となり二の丸内も小規模な建物が散見するだけで、藩主の屋敷は二の丸大手門の外に置かれた。藩士の住居も三の丸東半分にとめられ、三の丸の大部分は農地となった。城郭の衰退に反比例し、城下町は紅花をはじめとする特産品を扱う富裕な商人が集住していたことや出羽三山参詣の拠点として大いに栄える。

山形城三の丸には 11 の口(門)があった。現在の^{さいせいがん}済生館病院東側にあった七日町口は大手門として扱われた。七日町口内から二の丸大門までの道沿いには、18 世紀前半までは重臣の屋敷が立ち並び、幕末の水野時代でも家臣の屋敷が道沿いに立ち並んでいた。

明治維新により山形城は廃城となり、三の丸の堀や土塁の多くは撤去され、三の丸内にも庶民が住居を構え市街地化が進み、三の丸七日町口大手門跡には済生館病院が建設された。それに伴い、新道を建設する新しい都市計画も実施される。今回の調査起因事業である旅籠町八日町線^{はたごまち}も、この時期に作られた道路である。

しかし、モータリゼーションの発達により交通量が増

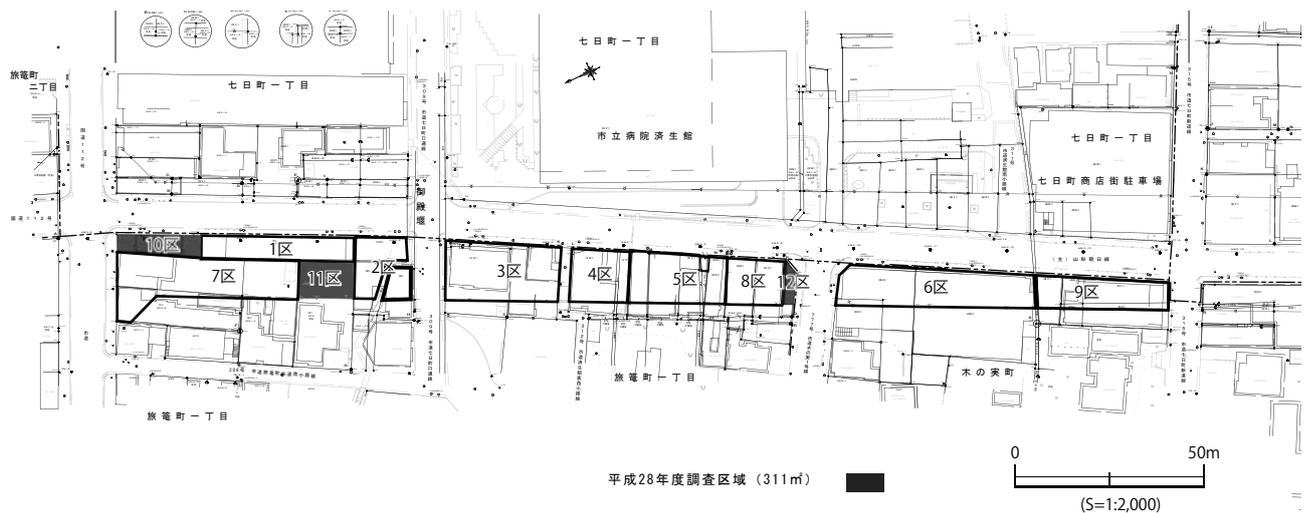


図1 調査区概要図



写真1 10区完掘状況（南西から）



写真2 10区SK13土坑完掘状況（北から）

大し、市街地での交通の停滞や事故の危険性が指摘されるようになる。そのため、幹線街路の利便性を高めるために山形広域都市計画道路事業が計画され、その一環として旅籠町八日町線を拡幅することとなり、三の丸跡の発掘調査を実施した。事業区内、27年度は1,873㎡、28年度は1,425㎡、今年度は311㎡を現地調査した。

遺構と遺物

今年度は、北から10、11、12区の地区の合計311㎡を調査した。10、11区は三の丸外の町家地区であり、12区が三の丸内部の武家屋敷地区である。

10区は、以前建っていたタクシー会社の基礎工事によりほとんど削平を受けていた。一部に近現代のものと思われる大量の焼土と炭化物を埋め戻した方形のSK13土坑を検出したものの、年代を特定できる遺物は出土しなかった。土坑は、崩落防止のために壁面に杭が刺された跡が有り、木製の壁材を固定していた。また、その土坑からは、鉾滓も多く出土したが、近世以降付近に鍛冶、

鋳物などの営業が確認できず、由来が不明である。

11区には樹齢70年ほどのもみの木があった。目立った遺構は検出されず、戦時中に作られた家庭用のSK07防空壕跡が検出された。また、堀跡である2区との境の調査区南側から少なくとも二段積まれた石組が検出された。堀の外には、秋元、水野時代の絵図を見ると牢獄があり、明治初期まで使用されていた。

12区は昨年度調査した8区の南隣りである。調査区が狭かったこともあり、目立った遺構は検出されなかったが、東壁際のピットから、江戸後期の陶磁器片が、南側の土坑からかわらけが出土した。また、文字瓦片も出土した。

まとめ

今年度の調査は10、11、12区の311㎡を対象にして実施した。これで三年度に渡る一期工区の現地調査は終了した。今年度のみでなく三年度に渡る調査の成果を簡潔にまとめる。



写真3 11区完掘状況(北北東から)



写真4 SK07防空壕検出状況(北北東から)



写真5 SK07防空壕完掘状況(北北東から)



写真6 SG02壕跡出土甕(北から)

2区は三の丸の堀跡で、北側の法面は11区との境界で検出できた。堀の規模は幅14mほど、深さ2mほどで、上部には二段の石組が残っていたが堀は素掘りで底面が自然堆積の礫層に達していた。石組は本来もう少し高かった可能性もある。堀は近代以降の瓦礫を含む土で埋め立てられていた。横町口と十日町口に近しい村山保健所敷地内の調査では堀跡の深さは8mあまりに達していたが、山形第七小学校敷地内で見つかった堀跡は今回の調査とほぼ同規模であり、三の丸の堀は門の付近だけ大規模であった可能性がある。

堀の北側の1、7、10、11区は城外であり、三の丸の構築後に町場として整備されていた。また、秋元時代以降には藩の牢獄が置かれていたことも絵図より判明している。1、7区からは近世陶磁器を伴う廃棄土坑が検出されている。また、7区からは中世の可能性が高い竪穴建物跡も検出された。11区からは戦時中の防空壕が検出されている。

2区と3区間の市道は、近世三の丸の土塁であった

と推測される。明治初年に堀を埋め立てるために崩されて、土地の区画整理で道路化されたとみられる。

3区から南は、近世は藩の有力家臣の武家屋敷が立ち並んでいた区域である。3区と4区、6区は、鉄筋コンクリート建物の基礎により激しい掘削を受けて、遺構遺物の残存状況が非常に悪かった。

5区と8区には、近世の井戸跡やピット、廃棄土坑の他に幅4m、深さ1mほどの区画溝跡を検出している。市教委が実施した^{ふたばちょう}双葉町遺跡で検出された三の丸構築以前とみられる大型区画溝と極めて酷似しており、時期も性格も同じものである可能性が高い。また、同時期と思われる鉾澤が土坑より大量に出土した。

9区も掘削を受けて遺構の残存状況は悪かったが、中世と思われる火葬墓が検出された。

これら3年度に及ぶ調査の成果を、今後整理作業を行い報告書にまとめて刊行する。



写真7 SG02 堀跡北壁石組検出状況 (北東から)



写真8 SG02 堀跡北壁石組 (南南西から)



写真9 12区完掘状況 (北北西から)



写真10 12区出土かわらけ (北から)



写真11 12区出土かわらけ (北西から)



写真12 12区出土文字瓦 (北から)



写真13 12区出土磁器碗 (北北西から)



写真14 12区出土石鉢 (北から)